

俳人協会々報

1971年
12月
No. 40

富安風生先生

芸術院賞受賞祝賀会

富安風生先生（協会顧問・若葉主宰）の芸術院賞受賞祝賀会は、十月二十九日（金）夜、協会、若葉社共催によって帝国ホテル孔雀の間において盛大に行なわれた。

芸術院賞の受賞は、去る五月のこと、いささか時期後の感もあったが、これは偏に風生先生の固い辞意によるものであった。当日は、山本健吉氏等の来賓をはじめ俳人協会、若葉社中を中心に約一七〇名の参会者を得、岸風三樓氏司会の下に、きわめて和気霽々とした雰囲気の下に、祝賀の宴が進められた。

開会の辞は、若葉同人会長の遠藤梧逸氏が述べ、風生先生の人生態度に触れ、その大成に天が長寿を賜ったことを寿い

だ。

来賓の祝詞は、まず水原秋桜子会長が立たれ、五十年以上に亙る渝らぬ交友を喜ぶとともに、月に四十句もの作品発表を続けるその作家エネルギーを讃え、八十七翁にしてなお上り坂というに至っては、ただただあれよあれよと見守るばかりと結ばれる。

ついで、山本健吉氏（芸術院会員）は氏が若き日、改造社の「俳句研究」編集長時代、風生先生との出会いにはじまり今日の俳句界に境涯の俳句があるとする。風生先生の俳句がそれではないか。齢とともに深まる艶、人生の艶が風生俳句の特色であると述べ、荒垣秀雄氏（社会評論家・前朝日新聞天声人語執筆）

は、風生先生の句集「富士百句」について触れられ、これは横山大観、梅原竜三郎、林武の画く自然の中の富士ばかりでなく、北斎、広重にみる自然と人間とのかわり合いの中にある富士がそこにあることを讃えられた。



そして、井出一太郎氏（衆議院議員）は、ついこの間まで郵政大臣であっただけに、風生先生が省内に俳句というよき伝統を残されたことをよろこばれた。因に氏は吉植庄亮門で歌誌「橄欖」同人、また野鳥の会の理事でもあるだけに短いスピーチの中にも滋味深いものがあつた。

そのあと、角川源義氏令孫清水彩子、香子の両嬢から風生先生に花束が贈られ、また岡本眸氏から敏子夫人に内助の功を讃えて花束が贈られた。ここで乾杯となり、山口青邨氏が「弟が兄のよろこびをよるこぶごとく皆様とともに祝盃をあげたい」と音頭をとられた。

しばらくは、料理を賞味し、それぞれに歓談のあと、中村汀女氏（風花主宰）が立って風生先生ご夫妻の健勝を祝し、ついで井本農一氏（お茶の水女子大教授）は、風生作品がいろいろの面を兼ね備え、即く人によってさまざまな音色を発する正に大家家であると述べられた。辻寛一氏（衆議院議員・俳人）は、作家風生の名が不滅のものであることを祝し、金子鷗亭氏（書道家・芸術院賞受賞）は、このたびの院賞に加えて、芸術院会員に、さらには文化勲章と一生かけて国家的榮譽を得られる人に違いないと結ばれた。

風生先生が、俳人協会および若葉社から贈られた大きな二つの花籠の間立たれた。

『この度の受賞は、全く思いも設けぬ分に過ぎたものである。私の巡り合せ、運がよかったということに帰着する。一個人私が載いたものではなく、伝統俳句自身に与えられたものと思う。私は、俳句を愛することにかけては誰にも負けなつもりでいる。自ら俳句の虫を以て任ずる私は、今後も精一ぱい鳴く音を絞って、この榮譽に応えてゆきたい。』と挨拶された。万雷の拍手はしばらく鳴り止まなかった。

最後に、大野林火氏（浜主宰）が、簡潔のうちにも心のこもった閉会の辞を述べ、かつ風生先生の御健祥を祝して万歳の音頭をとられた。万歳三唱のどよめきのうちに、つつがなく、しかも盛大に祝賀会を閉じた。時に午後八時であった。

〔出席者〕—敬称略—

富安風生・富安敏子

（文化関係）荒垣秀雄・阿部洋子・井出一太郎・井本農一・宇野信夫・大森昭二

金子鶴亭・栗山理一・車谷弘・南江治郎

西川信一・山本健吉

（政財界関係）宇野宗佑・長田裕二・大野勝三・荘宏・杉田泰三・竹下一記・辻寛一・西村尚治・長谷慎一・柳田誠一

（協会会員）水原秋桜子・山口青柳・安住敦・青木よしを・石塚友二・稲垣きく

の・石田あき子・井沢正江・池上浩山人

石井桐陰・岩崎健一・上田五千石・有働亨・潮原みつる・内山せつ子・遠藤梧逸

大野林火・大久保橙青・及川貞・尾形不

二子・岡本眸・大場美夜子・会美翠苑・荻野泰成・角川源義・加倉井秋を・勝又一透・柏木白雨・河上風居・岸風三樓・岸田稚魚・清崎敏郎・草間時彦・轡田進久保ともを・五所平之助・番西照雄・古賀まり子・神山幸子・沢木欣一・三溝沙美・佐々木康人・柴田白葉女・篠田悌二郎・菖蒲あや・杉山岳陽・鈴木真砂女・鈴木杏一・鈴木青園・曾根けい二・田中

戸川朝人・成瀬桜桃子・中村春逸・長島

第二回俳句色紙短冊展

—盛会裡に終わる—

俳人協会主催、第二回俳句色紙短冊展は、十一月五日（木）より十日（水）までを会期として、東京新宿・京王百貨店において催された。

出品者は、水原秋桜子、富安風生、山口青柳、山口誓子、阿波野青畝、中村草田男、中村汀女、秋元不死男、安住敦、石川桂郎、石塚友二、右城暮石、遠藤梧逸、大野林火、角川源義、加倉井秋を、加藤かけい、岸風三樓、木村蕪城、清崎敏郎、番西照雄、五所平之助、沢木欣一、清水基吉、能村登四郎、橋本鶏二、原

千城・中火臣・新村寒花・能村登四郎・野沢節子・長谷川秋子・林翔・原裕・橋本花風・長谷川浪々子・樋口玉蹊子・福永耕二・古館寿青・細見綾子・細木芒角星・堀喬人・松野自得・松崎鉄之介・松本旭・松岡凡草・松井章一路・宮津昭彦宮下翠舟・三宅秋女・三谷貞雄・村山古郷・森重昭・山本嶮迷・山本馬句・山崎ひさを・行広清美

（若葉社関係）有竹秋耳ほか約五十名。
（山崎ひさを）

ウ子、平畑静塔、福田蓼汀、皆吉爽雨、渡辺桂子の各氏。

この催しは、伝統俳句の普及と一般愛好家への作品即売を兼ねたもので、売上の純益はすべて協会記念事業の一つである俳人会館建設資金に繰り入れることになつてゐる。初日の会場は第一回にまさる活気を呈し、展示作品および、ショーケースに並べられた作品のおよそ半数が売約済となる盛況で、その後も連日参観者、作品希望者がつづき、会場詰めの方々は応接

にいとまのなかつたほどである。染筆俳句の意味についての熱心な質問者が多かったことは、一般大衆の俳句への関心を示すもので意義深いことの一つであった。また、作品の希望をさらべた結果では、正月の句、雛祭の句など四季の行事に関するものがことに好評であった。延べ入場者数はおそらく五千を越えたかと思われる。会場に備えた出品目録は会期半ばに至らぬうちに全部盛況であった。

会場には水原秋桜子会長夫妻はじめ、山口青柳顧問、安住敦、石川桂郎、角川源義、加倉井秋を、岸風三樓、清崎敏郎、浜木欣一ほかの諸幹事また、加畑吉男氏未亡人などもわざわざ足を運ばれ和やかな雰囲気をもした。

なお、会場のコーナーに本年度物故者の菅原馬（同人）主宰、加畑吉男（協会常任幹事、「若葉・春嶺同人」）両氏の遺作を参考展示し、生前を偲んだ。

この催しのため、各社より次のように多数の役員協力者を出していただいたので記録にとどめ感謝する。

草間時彦、原裕、岸田稚魚、有賀辰見岡田日郎、轡田進、成瀬桜桃子、松崎鉄之介、松本旭（以上幹事）、青柳志解樹、秋山夏樹、石田勝彦、井沢正江、池月一陽子、尾形不二子、小山梧雨、向山隆峰、佐藤春子、佐野美智、清水径子、島世衣子、外川銅虎、中尾寿美子、広沢紀念子、山田みづえ、和田暖泡の諸氏。

（原裕）

第七回 関西俳句大会記

十一月十四日(日) 大阪府農林会館



台風三五号が沖繩近海に接近し、本土南方海上を東北に通過するという予報の朝、大阪の空は一面雲におおわれていた。したがって今日の参会者の出足も気づかわれたが、相対時間前から詰めかける人もあり、受付に大童の婦人達の様子が

を見て安心する。

本部からの出席予定者では秋元幹事長がまず第一着、地元選者も加えて控室もだんだんと賑やかになってきたところへ、新大阪駅まで迎えに出られた皆吉爽雨氏に案内されて水原秋桜子会長ご夫妻が着かれる。

ホールの方は、去る十月三十一日逝去された故大橋桜坡子氏の遺影を前に、心なしか平生より静かに開会を待つ人、一時半締切の当日句を案ずる人で椅子も殆んど埋まっている。

一時二十分、司会塩川雄三、辻田克己の両君によって開会され、恒例により米沢吾亦紅支部長登壇、本部から来席の三先生に謝辞を述べ、あいさつにさきだち本大会の第一回よりご協力を賜っていた故大橋桜坡子氏の逝去に対し弔意動議あり、一同起立して一分間の黙禱を捧げる。

つづいて本大会の応募句数四三八七句、予選句数二二一九句についての経過を報告し、当日投句の選者を東京からご出席の三氏と阿波野青歌氏に依頼するこ

とを報告して降壇。

次ぎに水原秋桜子会長が起られ、本日の岡田利兵衛氏の講演を期待して出席したことを述べられ話は故桜坡子氏のこと及び、俳句においては先輩であること、秋桜子会長がホトトギスを去られたときの桜坡子氏の友情について秘聞ともいふべき一件を聞かされ感銘する。

なお関西の大会運営よろしきについてお賞めの言葉を頂き、今夏の生駒吟行大会の出席四五〇名も関西にしてうべなるかなと激励の言葉を頂く。

また先般東京で開かれた俳人協会吟行で、初冬の井頭公園の禽舎で時鳥を見たことから八時鳥冬木の枝を踏みわたるの古句を引用して興味あるお話を加えて承ることができた。

続いて起られた阿波野青歌氏も故桜坡子氏を悼まれたあと谷崎潤一郎の文章読本の一文を例に(1)わかりやすい言葉(2)強い印象を与える(3)日本語を美しく使う、の三要論については俳、文一軌であることのお話は各自実作について反省するところがあつた。

プログラムはいよいよ参会者一同の期待していた岡田利兵衛氏の講演、題は「芭蕉の審と風雅と人」に移り会場も文字どおりの満席で、記録係に聞いて見ると正味二三〇人とのことである。

岡田先生冒頭より予定時間延長もあるべしと直ちに本題に入る。はじめのお言葉のとおり約十分余延長

して三十分分に講演は終わったが、淀みなく魅了されたその講演は一同聞きてなお足らずの感であつたと思う。

休憩十五分、一息入れて一同着席したところで大会募集句特選句短評が出席選者十二名によって行われた。そのうち故桜坡子氏と最も近い関係にあられた皆吉爽雨氏は短評にさきだつて、その人柄の一面を述べて故人を悼まれた。大正、昭和にかけての俳壇の貢献者で且つ関西在住の大先輩の逝去に思いをよせて今回の関西大会が終始したことは特筆してよいと思う。

秋元不死男幹事長からは、俳人協会の法人として発足するについての経過、今後の方針、事業計画並びに協会の動静等、地方の協会員の関心事について選評と共に承ることができた。

朝日新聞社賞、大会賞の五名には支部長からそれぞれ賞状、賞品が渡され、特選句入賞の選者短冊贈呈者一同には満場拍手を贈つて表彰する。

当日出句は浦野芳南(爽雨選) 沢田弦四朗(秋桜子選) 辻田克己(不死男選) 赤堀秋荷(青歌選)の諸君によって披露され、それぞれの特選句に対して阿波野青歌氏より各選者揮毫の短冊が渡された。

立冬を過ぎてはや一週間の窓に、既に夕蘭の迫る頃五時三十分右城暮石氏の辞で今日の関西大会を滞りなく終了した。(亀井 糸游)

アメリカカミズキも紅葉して

東京 井の頭懇親吟行会記(46・10・24日)

晩秋のうす日のさす武蔵野の井の頭公園自然文化園で、懇親吟行会は百名の参会者を得てひらかれた。中央線吉祥寺駅の南西にある井の頭公園は、池を中心に禽獣の檻もあって子供づれの格好の遊び場であるが、行楽期を過ぎた十月二十四日の日曜日は、朝十時の開園と同時に文化園に入ると、ベンチの上に羽根を横たえていた孔雀がおどろいて飛立ち、絶叫しない落葉の木木のたたずまいが今日ばかりはこの園を俳人のために解放してくれていた。

十時半頃から次第にふえた人影は殆んど吟行会の参加者で、十一時過ぎに夫人をともなつて木の間をすすんでこられる水原秋桜子会長のもとに中村草田男先生の姿が見え、これで諸選者がすべてお顔を見せられたわけである。実は今日の吟行会を催すに当って、吟行場所に適した会場選択に苦勞した結果、文化園内の資料館会議室は百名位が定員という事を承知で資料館を会場と定めたのであるが、百三十名あまりの参加申込に対して、いかに会場作りをするかが、世話係の頭を

なやました点であった。しかし受付の名簿を見るとどうやら百名位におさまりそうで、十二時に会場におさまった人員百

五名、まことに的を得た人数となった。園内の木々は檜、櫟、しでの雑木のほか朴や赤松の幹がそびえ、すぐ外を取りまく車の往還はげしい道路からの公害も受けず黄葉の真最中である。この園の名物であるアメリカカミズキも見事に紅葉して、句帖を手にした人影がそのひまひまに見られた。野口雨情の旧居を移したという童心居から彫塑館に通じる林中には、落葉にまじって椎の実がおびただしく地にまろんでいた。

十二時メ切の三句投句という規定は順調に守られて、二時半、諸選者を正面に全員がテーブルについて会は開かれた。中村将晴氏の司会で皆吉爽雨先生の開会の辞のあと、直ちに互選に入った。句会は、選者の諸先生方と参会者が一堂で選句をするという方法を取り、秋桜子会長から一番の句稿がまわりはじめると一斉に百余枚の句稿が動きはじめた。各選者の一挙一動をまのあたりにしながら、

文字通り膝を交えた句会に、いよいよ諸先生方に敬愛の念を感じ、懇親吟行会の意義を深く感じたのは私のみではなかったであろう。

池上樵人氏のできばきした句会進行によって選句終了。木谷島夫氏、茂恵一郎氏、井沢正江が一般披講を、各選者の披講をそれぞれの結社の方が行なつて三時に披講が終る。

引続き講評に立たれた秋桜子会長は、大正十二年に飯田橋から汽車にのつて遠足に來られたこと、また五十年前に数人で訪れて、芦むらの中に見えた池に鴉の浮いていたことなど、井の頭公園の思い出に今昔をなつかしうに話された。続いて中村草田男、角川源義の両選者の味い深い講評があり、各選者から特選句に對して、贈呈の短冊が贈られた。

三時四十分、沢木欣一先生の閉会の辞で吟行会はとどこおりなく終了した。

大会特選句

水原秋桜子選

朝の日がづらぬくまでの落葉焚

野崎ゆり香

中村草田男選

黄落や素声短かき親子鴨

小布施江緋子

皆吉爽雨選

山茶花の日ざししばらく額に受く

遠藤 正年

角川源義選

黄落や昼の灯吊りて驢馬の家



沢木欣一選

黄落を極む一樹下踏み入らず

小布施江緋子 茂恵一郎

細見綾子選

晩年足早や藁まだらに熟れ初むる

高橋 素水

加倉井秋を選

黄落や汲みきし水のふるへをり

野崎ゆり香

香西照雄選

水を掻くとき茜さす鴨の脚

笹川 正明

(井沢正江)

右城暮石素描

細見綾子

右城暮石さん、平畑静塔さんのお二人が本年度の蛇笏賞をお貰いになられた。その授賞式の席上で私が暮石さんのために記念講演をという事で、しかし時間が無かったので、極く短い話をした。

『私は今回の暮石さんの受賞を心から喜んでいいる。それは親しい人であると言ふ意味では無く、暮石さんの句業が広く知られることが嬉しかったのである。こういう地味な渋い背骨のおつた俳句が現在あるということが、俳句全体の上によりいことであるという点で嬉しかったのである。それで少し失礼かと思つたが暮石さんの今回の受賞は、大変爽やかであること、暮石さんは椅子に腰かけて順番を待っていた人ではないこと、順番を待っていない所へ賞が行つたことは意表に出ずるものであること、意表を出ずること、意表であるなら、正に今回の受賞は俳諧であること、その意味で爽やかさを感じるものであると思ふこと、俳諧というならば暮石さんが奈良富雄の山を下りて、多少の異和を感じつつ、ここに出席されたことも俳諧である。今回の受賞

は、お貰いになる方にも勿論拍手を送るものであるが、贈られる方側にも、それにも劣らぬ拍手を送りたい』そう云うことを話した。

右城暮石さんは、土佐の人である。作家、上林暁と同郷で二人は大変よく似ていると思ふ。しっかりと背骨をもつていてしかもつつしみ深い、意に染まぬこととはしない深べきさを持っていて、どちらから見ても日本的である。最も日本的なる日本人である。

奈良の山の中腹に家を作り、もう四十年近くそこに住んでいる。定年退職後は専ら家の周囲の果樹、花奔、野茶の手入れなどして一見悠々自適の生活だが単なる悠々自適ではなく、ここで最終最良の腰の据わつた生活をしようとしているのである。私にはそういう風に見える。腰の据わつた生活だけがもたらすぎりぎりの俳句を作ろうとしているようである。

暮石さんの俳句は一見何でも無いように見えて、打ち込みが深い。鈍器のように見えて、精鋭である。心して読まないで見誤ることがあるほどに精鋭な精神作

用の働らいた句が多い。艶を消し、小技巧を排し、鈍重に歩みながらここまで来た人である。そして事物の実態に迫ろうとして来たと思う。自分を消しているがら又実によく自分を活かしてもいる。そういう妙味にはいりこんでいる稀な俳句である。

ユーモア、現今、姿を消したかに思われる上質のユーモアがこの人の俳句にはある。意識して面白がらせようとしているのでは無いが、真底真顔である所に生まれるおのずからなるユーモアはこの人独得のものである。

大正十年、大阪の松瀬青々の門に入り、雑誌「倦鳥」に属し、青々の高弟としてその名を馳せた。青々没後しばらくして山口誓子氏の天狼に属し今日に至っている。句集は昭和三十四年(近藤書店刊)に「声と声」、昭和四十五年に「上下」を出している。右の二つの句集より代表句と思われるものを数句抄出した

金堂の壇にて馬鈴薯を頒つ
夜ばかり帰りに梅の花ひらく
人に会ふたびに汚れて我がハンカチ
紙籬の薄きを人の裏返す

牛肉の赤きをも蟻好むなり
火事衰てみたり電柱の尖然えて
まだ何もせぬ根切虫見つかりし
干し布団厚きは稀の客のため
のろのろと来し嵐風の忽ち去る
寒くして汐水真水分ちなし

蓮根を終日掘りて微々たる跡

◆ 受贈句集

◇句集「淡酒」 草間時彦著

発行所 草間時彦 (逗子市桜山一六一)

一六 私家版

◇句集「海戸」 藤井 互著

発行所 濤書房 (横浜市港北区下田町九二四)

定価 一〇〇〇円

◇「小倉栄太郎句集」小倉栄太郎著

(鶴叢書第五十七篇)

発行所 小倉栄太郎句集刊行会 (保谷市細沢二一七一六 多田方) 非売品

◇句集「石の花」 三野虚舟著

発行所 竹頭社 (千代田区神田錦町三一六)

私家版

◇「青女選集」 新明紫明編

発行所 青女発行所 (旭川市三条五丁目左十号 滝音真雄方)

◇「五島沙歩郎句集」発行者 五島みつ子 (鶴叢書第五十九篇)

発行所 草韻社 (北区滝野川一六一八 岸田方)

私家版

◇句集「山椿」 神野ともえ著

発行所 水明発行所 (浦和市東神町二五一〇)

定価 一〇〇〇円

◇句集「花菜集」 松野加寿女著

(さいかち叢書第三十五集)

発行所 新樹社 (文京区目白台一三三一五)

定価 一五〇〇円

スペインの花夾竹桃

吉野義子

わたしの家のすぐ近くに、夾竹桃の生垣をめぐらすカトリック教会がある。夏になると、生垣びしりに夾竹桃が咲き、その緋色は、南国の碧い空を背景に、幾日も幾日も炎えつづける。

教会には、古くから二人のスペイン人の宣教師が棲んでいて、時折り、黒衣を風にひるがえしながら、足早やに夾竹桃の門を出入りする。その鮮明な印象は、少女のころから心にやきつき、いつの間にか、夾竹桃と神父は切り離すことの出来ないものとして、わたしのイメージの中に育った。



この七月、二十日ばかり、わたしは夫とともに、北欧とスペインのアンダルシヤ地方を旅した。

空から見るアンダルシヤ地方は、薄茶色一色で、もう二ヶ月も雨が降らないという。飛行機が高度を下げると、山は荒れ、野には、オリーブが点々と薄緑を灯していた。バスがセビリアの町に入ると、なつめ椰子、オレンジ、泰山木にまじって、夾竹桃が、赤白ピンタに咲きみだれていた。

その夜、わたしたちは、小さな劇場にフラメンコを観に行った。踊りがひけて外に出たのは深夜であったが、月明に匂うように咲く夾竹桃が、ガス燈の下に、花びらを重ねあい、まるで楽を奏でているかのように見えた。鈴を鳴らして馬車が近ずき、わたしたちは馬車に乗った。町の辻々に夾竹桃が咲き、その下に若い男女が群れ奏で、うたい、踊っていた。セビリア、コルドバを経て、アルハンブラの宮殿のあるグラナダに着いたのは、

五日の後であった。シエラネバタ山脈は、夏なお雪をいただき、アルハンブラの城壁に添って、糸杉は、炎天をよじのぼるかのようになやぎながら、高くそびえていた。フェネラリーフェの庭園には、夾竹桃のトンネルがあり、緋色のただよう空気に染んで、わたしはひとり歩いた。山肌をくりぬいて棲む、ジブシーの村、サクロモンテにも夾竹桃は咲いていた。

グラナダからマラガへの道はけわしく、幾重にも、山また山を越えた。乾き切った山肌はひび割れ、オリーブは枯れ、谷には一滴の水もなく、樹々はみにくい骸となつてつっ立っていた。その中に、夾竹桃だけは、療乱と咲いていた。谷あれば緋色あり、緋色は群れ、また離れ、花々は生命にあふれ、強い太陽にかがやき咲いていた。それはあたかも、追われ追われても、あとを絶たず、国はなくとも、家はなくとも、根強く生きぬくジブシー。夜となれば、どこからとなく集い、楽を奏で、うたい、踊りまくるジブシーとあまりにもよく似ていた。わたしには、この二つの命が同じように思えてならなかった。

一度は、地中海を、イタリー、フランス、イギリスまでも征したスペインの勢力と、けんらんたる文化のあとをたどりながら、旅を終えた今、わたしには、夾竹桃こそスペインの花であるとしみじみ思う。

教会の生垣に、夾竹桃を植えた神父の郷愁が、いまこそわかるような気がする。
(浜同人)

◆ 受贈句集

◇句集「足壺」 佐野鬼人著

(昭和俳人選書六)

発行所 春日書房 定価 八〇〇円

(千代田区神田塚本町二一五)

◇句集「沼畔」 小山田杼雨著

(鶴叢書第五十四篇)

発行所 竹頭社 定価 八〇〇円

(千代田区神田錦町三一六)

◇句集「水声」 椎橋清翠著

(現代俳句鹿屋作家叢書)

発行所 今日派出版

(世田谷区世田谷二一九一三五)

◇句集「きりえ」 竹田鉄三著

発行所 竹田鉄三神父古稀記念出版

委員会 限定 一〇〇〇部